

ドゥルーズ&ガタリの「リトルネロ」概念を解明する

内藤 慧 (東京大学)

哲学者ジル・ドゥルーズと精神分析家フェリックス・ガタリは1970年代から共著活動を開始し、『アンチ・オイディプス』『ミル・プラトー』『哲学とは何か』といった大著を著わした。これらは哲学書であるが、人類学、精神分析、美学、生物学等、他の諸領域の議論を横断的に、かつそれら諸領域と密接に議論を展開する。「リトルネロ」を巡る議論はその最たるものであり、ドゥルーズはこれを「哲学の概念」として発明したと語る一方、『ミル・プラトー』第11章「リトルネロについて」は子供の歌、鳥のさえずりから、バロック・ロマン派・現代音楽という西洋音楽史の展開まで、極めて多岐に渡る音楽芸術の事例に依拠し、それらを説明する概念となっている。実際「リトルネロ」に関する研究は「ドゥルーズの音楽論」という形で展開される傾向にある(Bogue, *Deleuze on Music, Painting, and the Arts*, 2003.など)。本発表も、「リトルネロ」を純粹に「哲学の概念」として解明することを目論むものではないが、むしろあくまで「哲学の概念」である「リトルネロ」が、なぜ音楽芸術に強く依拠する仕方以外では議論され得なかったのか？その時「音楽」とは何なのか？という問題提起を行いたい。これは哲学と音楽・芸術の関係という、より広いトピックにまで敷衍して考えられるべきだろう。

この「リトルネロ」や「音楽」は人間の芸術活動のみならず自然における同等の活動、例えばハバシニワシドリのテリトリー表示行動をも包含する。「芸術は動物とともに始まる」というドゥルーズ&ガタリの言葉の通り、芸術は人間固有の活動とはみなされず、あらゆる個体が為す領土化／脱領土化の運動の一形態と考えられる。この観点からドゥルーズ芸術論は、個体を形 *forme* ではなく力 *force* によって捉える「生態学 *éthologie*」的な構想に基づいて(Sauvagnargues, *Deleuze et l'art*, 2005.)、「非人間主義 *inhumanisme*」という仕方で理解される(Montebello, *Deleuze, esthétiques –la honte d'être un homme–*, 2017.)。本発表はこのような理解を全面的に批判するものではないが、対して以下の点を強調したい。それは「リトルネロ」の3段階の議論において、人間固有の営みである西洋音楽史が辿り直され、バロック・ロマン派・現代音楽という3区分がそのまま「リトルネロ」の3段階に対応するという点である。つまり非人間主義的な構想に依拠する「リトルネロ」によって、ドゥルーズはあくまでも人間固有の具体的な芸術活動を説明しようと努めているのである。

本発表は『ミル・プラトー』における「リトルネロ」を巡る議論を精査しつつ、「哲学」に対する「音楽」、「自然」に対する「音楽」の位置付けを検討する。哲学と芸術、

芸術における人間と自然の関係、という巨大な2つのテーマを考えるための一つのケースとして、本発表は「リトルネロ」概念の解明を試みる。